祭壇の火を取れ！

花田憲彦

今年、私は毎朝6時からＬＩＮＥのオープンチャットで「３６５日の祈り」を配信し、ディボーションによる弟子訓練を行っています。現在２２５人が登録し、約１３０人が参加しておられます。毎朝の配信にはさまざまな犠牲や努力が伴いますが、私の覚悟を支えているのが、サムエルのこの言葉です。

「わたしもまた、あなたたちのために祈ることをやめ、主に対して罪を犯すようなことは決してしない。あなたたちに正しく善い道を教えよう」（サムエル記上12章23節）。

救いは聖霊の働きですから、人が救われるためには、必ず誰かの執り成しが必要です。もし私たちがその祈りを怠るなら、それは神に対する罪であると聖書は語ります。なぜなら、私たちには「祭司」としての使命が与えられているからです（ペトロの手紙一・2章9節）。

今、日本のアドベンチスト教会に「執り成す」という文化が少しずつ根付き始めているように感じます。しかし、現実にはまだ産みの苦しみの中にあります。それでも私たちは、人々の救いのために執り成すことを決してあきらめてはなりません。

緊急事態の中で

今期、私たちは出エジプト記を学んでいます。そこには、イスラエルの民がつぶやき、不平不満を口にし、指導者モーセとアロンに反逆しようとする姿が繰り返し描かれています。民数記16章のコラ、ダタン、アビラムの反乱はその最たるものです。

このとき、神が介入されました。反逆した人々は裂けた地面に次々と飲み込まれ、天からの火で焼き尽くされ、さらには疫病が民を襲い、1万４７００人が命を落としました（同17章14節／口語訳16章49節）。

この緊急事態の中で、モーセはアロンに叫びます。「祭壇へ行ってきなさい！」と。事態は切迫していました。目の前でどんどん人々が死んでいくのです。切羽詰まった事態がアロンを祭壇に走らせました。滅びゆく人々を執り成すためです。

聖書にはこう書かれています。

「アロンは、モーセの命令どおりに行い、集結している人々の中へ走って行った。疫病は既に民の間に広がり始めていた。アロンが香をたき、民のために罪を贖う儀式を行い、死んだ者と生きている者との間に立つと、災害は治まった」（同17章12、13節／口語訳16章47、48節）。

生きている者と死んでいる者との間に立っていたのは、ただ一人の信仰者でした。教会でもなく、会議が開かれたわけでもなく、ただ一人の人が執り成したのです。そして、その一人が変化を生み出しました。

今、終わりの時代にあって、日本の地でも多くの人々が霊的な死に直面し、滅びに向かっています。でも、もし一人でも覚悟をもって祭壇の火を取り、「死んだ者と生きている者との間に立つ」決意をするならば、世界は変わるということを、この聖書の箇所は教えているのではないでしょうか。そして、その一人が、あとに続く者たちを奮い立たせるのです。

ディボーションという「日毎の奉仕」

では、私たちにとって祭壇の火を取るとは、どういうことでしょうか。祭壇の火とは、犠牲が捧げられて初めて起こされる火、つまりイエス・キリストの十字架の犠牲によって与えられる聖霊の臨在を象徴しています。ですから、私たちがその祭壇の火を取るということは、まず、私たち自身が神の前に立ち、主の臨在に触れるということです。主の臨在に触れるとき、私たちは人々の魂にも触れることができるようになります。

そのためには、週に一度、礼拝のときだけ聖書を開くということだけでは絶対に不十分です。毎日御言葉に触れ、その中で、自らの罪を主に告白し、明け渡していくディボーションという「日毎の奉仕」が必要です。それなくしては、どんなに頑張っても、あるいは教会でどんなにたくさんのすばらしい行事をこなしたとしても真の変化は起こりません。

主の臨在に触れるとき、私たちの内に確かな変化が起こります。人々の魂に対する愛が湧き上がり、献身の思いが深まるのです。

愛するとは、どのようなことがあっても、相手と関わり続ける姿勢です。モーセは自分に反対する人々をそのまま神の裁きに委ねることもできたはずです。かえってそうしたほうが、彼にとっても楽なことでした。しかし、彼は自分を悩ませるイスラエルの人々を決して見捨てず、民と関わり続けたのです。

『人類のあけぼの』にはこう記されています。

「モーセは、この恐ろしい危機にあって、自分が飼っている群れに対して真の羊飼いとしての思いやりを見せて、そこを去ろうとしなかった。彼は神の選民が、神の怒りによって全滅されないように嘆願した。こうした彼のとりなしによって、復讐（ふくしゅう）の手は止められ、不服従で反抗的なイスラエルは全滅を免れたのである」（35章より）。

モーセは決してあきらめず、「そこを去ろうとしなかった」のです。主の臨在を求め続けた彼は、主の心と一つにされていました。だからこそ、魂の救いに対する情熱も衰えることはなかったのです。

私たちは小さな者ですが、心を込めて関わり続けるとき、必ず大きな変化が起こると信じます。そのために、祭司としての「日毎の奉仕＝ディボーション」の務めが与えられているのです。

このとき、アロンは１００歳でした。そんな高齢の彼が祭壇まで走ったのです。できないはずのことが神の力によって可能となりました。私たちも時に、「それはできません」と心の中でつぶやくことがあります。でもそれは本当に「できない」のではなく、「したくない」だけなのかもしれません。

主は今、あなたに語りかけています――「祭壇まで走れ！」と。謙遜な心で、主の召命に応えたいと思います。

●はなだのりひこ
1967年、福岡県生まれ。山口大学経済学部、三育学院カレッジ神学科各卒。AIIAS修士課程修了。元キリスト新聞社編集局記者。天沼教会、東京中央教会、神戸有野台教会、伝道局長、メディア出版局長などを経て、現在、立川教会・多摩永山教会牧師（福音社編集長を兼任）。立川市民生委員として地域伝道に邁進中。

◂◂ 365日の祈りに参加される方は、こちらから登録してください